

国語 解答 岐阜大学 教育学部、医学部（看護学科）
一 現代文

問一	a 微妙	b 喫緊	c 樹立	d かえり	e 模範
f 繕	g 摩擦	h ぜんしん	i 甚大	j 禍	

問二 現実的な根拠もないのに、人々が過大に評価しているという意味。

問三 戦前の経験が克服すべき具体的な過去として参照されているから。

問四 いつの時代にも未来は不確実なのに、それを現代の特徴としているから。

問五 エ

問六 社会の不確定な変化に対応するための主体性の内実は不確定でしかないのに、主体性が欠如していると強調することで、その必要性を人びとに受け入れさせてしまうということ。

問七 前提が不確実だとそこから導き出される結論も不確定であるというように、前提とそこから導き出される結論が結局は同じことの繰り返しになっっているということ。

問八 現実的な観察とそれに基づく考察(15字)

問九 それまでの日本社会の欠陥をふまえ、主体性はその欠陥を克服するために必要な批判的精神や自主独立の精神という意味であったが、変化の激しい不確実な未来を前提とし、主体性はそうした未来に対応するために自ら課題を見つけ克服する資質や能力という意味に変貌した。

問十 私たちが不確実な未来にどう対応してきたかという過去の経験を徹底的に検証したうえで、自分たちが直面している、現在進行中の不確実な未来にどう対処していくべきかを十分に思索していく。

二
古文

問一 ア おそれいりますが イ 二人とも ウ なんとまあ エ もつともである

問二 あの光源氏の妻の紫上は、ましてどうしてこのあたりにいらっしやるだろうか、いや、いらっしやるはずがないと、私は聞いて座っている。

問三 五十日の祝いの酒宴で参加者が酩酊して悪酔いしても、道長は放置していて、自分たちが面倒なことに巻き込まれそうだから。

問四 「な」は完了（強意）の助動詞「ぬ」の未然形で、「む」は意志の助動詞「む」の終止形。

問五 「いかに」が「五十日に」と副詞「いかに」の掛詞となっている。

問六 千年でも十分でなさそうな末長い若宮のご将来が、取るに足りない私の気持ちにさえ、自然と思い続けられる。

問七 若宮の五十日の祝いを迎えて有頂天になり、酩酊状態で軽口をたたく道長に対する、ほほえましく思う笑い。

問八 エ ウ ア イ

三

漢文

問一 a 容色 b 私 c 嫌う

問二 これをあいすることわうよりもはなはだし（これをあいすることおうよりもはなはだし）。

問三 私にとって好ましくないことであっても、必ず言いなさい。

問四 新しい側室の鼻を切り落とさせよ。私の命令に逆らわせてはならない。

問五 新しい側室を可愛がることで嫉妬していないと王に思わせた上で、側室には王が彼女の鼻を嫌っていると偽って鼻を隠すように仕向け、王には側室が王の臭いを嫌っていると言って激怒させ、側室を処罰させた。